

# 冬の日

梶井基次郎

青空文庫



季節は冬至に間もなかった。堯たかしの窓からは、地盤の低い家々の庭や門辺に立っている木々の葉が、一日ごと剥はがれてゆく様さまが見えた。

ごんごん胡麻ごまは老婆の蓬髪ほうはつのようになってしまい、霜に美しく灼やけた桜の最後の葉がなくなり、櫻けやきが風にかさかさ身を震わすごとに隠れていた風景の部分が現われて来た。

もう暁刻の百舌鳥もずも来なくなつた。そしてある日、屏風びょうぶのように立ち並んだ櫨かしの木へ鉛色の椋鳥むくどりが何百羽と知れず下りた頃から、だんだん霜は鋭くなつてきた。

冬になつて堯の肺は疼いたんだ。落葉が降り留とどまっている井戸端の漆喰しつくいへ、洗面のとき吐く痰たんは、黄緑色からにぶい血の色を出すようになり、時にそれは驚くほど鮮くれないかな紅くれないに冴しえた。堯が間借り二階の四畳半で床を離れる時分には、主婦の朝の洗濯は夙とうに済んでいて、漆喰しつくいは乾つくいてしまつている。その上へ落ちた痰は水をかけても離れない。堯たかしは金魚の仔でもつまむようにしてそれを土管の口へ持つて行くのである。彼は血の痰を見てももうなんの刺戟しげきでもなくなつていた。が、冷澄な空気の底に冴さえ冴ざえとした一塊いろどの彩りは、何故か

いつもじつと凝視みつめずにはいられなかった。

堯はこの頃生きる熱意をまるで感じなくなっていた。一日一日が彼を引き摺ずっていた。そして裡に住むべきところをなくした魂は、常に外界へ逃れよう逃れようと焦慮あせっていた。——昼は部屋の窓を展ひらいて盲人のようにそとの風景を凝視みつめる。夜は屋の外の物音や鉄てつび瓶びんの音に聾ろうじや者者のような耳を澄すます。

冬至に近づいてゆく十一月の脆もろい陽ひは、しかし、彼が床を出て一時間とは経たない窓の外で、どの日もどの日も消えかかってゆくのであった。翳かげってしまった低地には、彼の棲すんでいる家の投影えいけいさえ没めしてしまっている。それを見ると堯の心には墨汁すみずのような悔く恨げやいらだたしさが拡ひろがってゆくのだった。日向はわずかに低地へだを距はてた、灰色の洋風の木造家屋とくぞうかやに駐とどままっていて、その時刻、それはなにか悲しげに、遠い地平ちへいへ落ちてゆく入日を眺ながめているかのように見えた。

冬陽は郵便受のなかへまで射しこむ。路上のどんな小さな石粒も一つ一つ影かげを持っていて、見てみると、それがみな埃エジプト及エジプトのピラミッドのような巨コロッセアル大コロッセアルな悲しみを浮かべている。——低地を距はてた洋館やうくわんには、その時刻、並んだ蒼あおざり桐とうの幽霊あやかしのような影が写うつっていた。向日性を持もった、もやしののように蒼白あざはくい堯の触手しゅじゆは、不知不識しらずしらずその灰色こはくした木造家屋とくぞうかやの方

へ伸びて行つて、そこに滲み込んだ不思議な影の痕を撫でるのであった。彼は毎日それが消えてしまうまでの時間を空虚な心で窓を展ひいていた。

展望の北隅を支えている檉かしの並樹は、ある日は、その鋼鉄のような弾性で撓しない踊りながら、風を揺りおろして来た。容貌をかえた低地にはカサコソと枯葉が骸骨がいこつの踊りを鳴らした。

そんなとき蒼桐の影は今にも消されそうにも見えた。もう日向とは思えないそこに、気のせいほどの影がまだ残っている。そしてそれは冪こがらしに追われて、砂漠のような、そこでは影の生きている世界の遠くへ、だんだん姿を掻き消してゆくのであった。

堯たかしはそれを見終わると、絶望に似た感情で窓を鎖かしにかかると、もう夜を呼ぶばかりの冪くたに耳を澄たましていると、ある時はまだ電気も来ないどこか遠くでガラス戸の擗くたけ落ちる音がしていた。

## 二

堯は母からの手紙を受け取った。

「延子をなくしてから父上はすっかり老い込んでおしまいになった。おまえの身体も普通の身体ではないのだから大切にしてください。もうこの上の苦勞はわたしたちもしたくない。

わたしはこの頃夜中なにかに驚いたように眼が醒める。頭はおまえのことが気懸りなのだ。いくら考えまいとしても駄目です。わたしは何時間も眠れません。」

堯はそれを読んである考えに<sup>せいぜん</sup>凄然とした。人びとの寝静まった夜を超えて、彼と彼の母が互いに互いを悩み苦しんでいる。そんなとき、彼の心臓に打った不吉な<sup>はくどう</sup>搏動が、どうして母を眼覚まさないといい切れよう。

<sup>たかし</sup>堯の弟は<sup>せきつゝい</sup>脊椎カリエスで死んだ。そして妹の延子も<sup>ようつゝい</sup>腰椎カリエスで、意志を<sup>うしな</sup>喪った風景のなかを死んでいった。そこでは、たくさんの虫が一匹の死にかけている虫の周囲に集まって悲しんだり泣いたりしていた。そして彼らの二人ともが、土に帰る前の一年間を横たわっていた、白い土の<sup>せつこう</sup>石膏の床からおろされたのである。

——どうして医者は「今の一年は後の十年だ」なんて言うのだろうか。

堯はそう言われたとき自分の裡に起こった何故か<sup>ばつ</sup>跋の悪いような感情を想い出しながら考えた。

——まるで自分がその十年で到達しなければならぬ理想でも持っているかのように。どうしてあと何年経てば死ぬとは言わないのだろう。

堯の頭には彼にしばしば現前する意志を喪った風景が浮かびあがる。

暗い冷たい石造の官衙かんがの立ち並んでいる街の停留所。そこで彼は電車を待っていた。家へ帰ろうか賑にぎやかな街へ出ようか、彼は迷っていた。どちらの決心もつかなかった。そして電車はいくら待ってもどちらからも来なかった。押しつけるような暗い建築の陰影、裸の並樹、疎まばらな街燈の透視図。——その遠くの交叉路こうさろには時どき過ぎる水族館のような電車。風景はにわかに統制を失った。そのなかで彼は激しい滅形を感じた。

穉おさない堯は捕鼠器ほそきに入った鼠を川に漬けに行った。透明な水のなかで鼠は左右に金網を伝い、それは空気のなかでのように見えた。やがて鼠は網目の一つへ鼻を突っ込んだまま動かなくなった。白い泡が鼠の口から最後に泛うかんだ。……

堯たかしは五六年前は、自分の病気が約束している死の前には、ただ甘い悲しみを撒まいただけで通り過ぎていた。そしていつかそれに気がついてみると、栄養や安静が彼に浸潤した、美食に対する嗜好しこうや安逸や怯懦きようたは、彼から生きていこうとする意志をだんだんに持ち去っていた。しかし彼は幾度も心を取り直して生活に向かつていった。が、彼の思索や行為

はいつの間にか伴りの響をたてはじめ、やがてその滑らかさを失って凝固した。と、彼の前には、そういった風景が現われるのだった。

何人もの人間がある徴候をあらわしある経過を辿って死んでいった。それと同じ徴候がおまえにあらわれている。

近代科学の使徒の一人が、堯にはじめてそれを告げたとき、彼の拒否する権限もないそのことは、ただ彼が漠然忌み嫌っていたその名称ばかりで、頭がそれを受けつけなかった。もう彼はそれを拒否しない。白い土の石膏の床は彼が黒い土に帰るまでの何年かのために用意されている。そこではもう転輾することさえ許されないのだ。

夜が更けて夜番の撃柝の音がきこえ出すと、堯は陰鬱な心の底で呟いた。

「おやすみなさい、お母さん」

撃柝の音は坂や邸の多い堯の家のあたりを、微妙に変わってゆく反響の工合で、それが通ってゆく先ざきを髣髴させた。肺の軋む音だと思っていた杳かな犬の遠吠え。——堯には夜番が見える。母の寝姿が見える。もつともつと陰鬱な心の底で彼はまた呟く。

「おやすみなさい、お母さん」



堯たかしは掃除をすました部屋の窓を明け放ち、籐とうの寝椅子に休んでいた。と、ジュツジュツという啼き声がかたまぐらの垣の蔭に笹鳴ささなきの鶯うぐいすが見え隠れするのが見えた。

ジュツ、ジュツ、堯は鎌首をもたげて、口でその啼き声を模まねながら、小鳥の様子を見ていた。——彼は自家うちでカナリヤを飼っていたことがある。

美しい午前の日光が葉をこぼれている。笹鳴きは口の音に迷わされてはいるが、そんな場合のカナリヤなどのように、機微な感情は現わさなかった。食欲に肥えふとって、なか堅いチヨツキでも着たような恰好をしている。——堯が模まねをやめると、愛想もなく、下枝の間を渡りながら行ってしまった。

低地を距へだてて、谷に臨んだ日当りのいいある華族の庭が見えた。黄に枯れた朝鮮芝に赤い蒲団が干してある。——堯はいつになく早起きをした午前にうっとりとした。

しばらくして彼は、葉が褐色に枯れ落ちている屋根に、つるもどきの赤い実がつややかに露あらわれているのを見ながら、家の門を出た。

風もない青空に、黄に化なりきつた公孫樹いちょうは、静かに影を畳んで休ろうていた。白い化粧

煉瓦を張った長い塀が、いかにも澄んだ冬の空気を映していた。その下を孫を負<sup>お</sup>ぶつた老婆が緩<sup>ゆっく</sup>りゆっく歩いて来る。

堯<sup>たかし</sup>は長い坂を下りて郵便局へ行つた。日の射し込んでいる郵便局は絶えず扉が鳴り、人びとは朝の新鮮な空気を撒<sup>ま</sup>き散らしていた。堯は永い間こんな空気に接しなかつたような気がした。

彼は細い坂を緩りゆっくりに登つた。山茶花<sup>さざんか</sup>の花ややつでの花が咲いていた。堯は十二月になつても蝶<sup>ちょう</sup>がいるのに驚いた。その飛んで行つた方角には日光に撒かれた虻<sup>あぶ</sup>の光点<sup>あぶ</sup>が忙しく行き交うていた。

「痴呆<sup>ちほう</sup>のような幸福だ」と彼は思つた。そしてうつらうつら日溜りに屈<sup>かが</sup>まつていた。——やはりその日溜りの少し離れたところに小さい子供達がなにかして遊んでいた。四五歳の童子や童女達であつた。

「見てやしないだろうな」と思いながら堯は浅く水が流れている溝のなかへ痰を吐いた。そして彼らの方へ近づいて行つた。女の子であばれているのもあつた。男の子で温柔<sup>おとな</sup>しくしているのもあつた。穢<sup>おさな</sup>い線が石墨で路に描かれていた。——堯はふと、これはどこかで見たことのある情景だと思つた。不意に心が揺れた。揺り覚まされた虻<sup>あぶ</sup>が茫<sup>ぼう</sup>漠<sup>ぼく</sup>とした堯

の過去へ飛び去った。その麗かな臘月の午前へ。

堯たかしあぶの虻あぶは見つけた。山茶花を。その花片のこぼれるあたりに遊んでいる童子たちを。――それはたとえ彼が半紙などを忘れて学校へ行つたとき、先生に断わりを言つて急いで自家うちへ取りに歸つて来る、学校は授業中の、なにか珍しい午前の路であつた。そんなときでもなければ垣間かしま見することを許されなかつた、聖なる時刻の有様であつた。そう思つてみて堯ほほえは微笑ほほえんだ。

午後になつて、日がいつもの角度に傾くと、この考えは堯を悲しくした。穉おきないときの古ぼけた写真のなかに、残つていた日向ひなたのような弱陽が物象を照らしていた。

希望を持ってないものが、どうして追憶いづくを慈しむことができよう。未来に今朝のような明るさを覚えたことが近頃の自分にあるだろうか。そして今朝の思いつきもなんのことはない、ロシアの貴族のように（午後二時頃の朝ちよう餐さん）が生活の習慣になつていたというこのいい証拠ではないか。――

彼はまた長い坂を下りて郵便局へ行つた。

「今朝の葉書のこと、考えが変わつてやめることにしたから、お願いしたことご中止くだ

さう」

今朝彼は暖い海岸で冬を越すことを想い、そこに住んでいる友人に貸家を捜すことを頼んで遣つたのだつた。

彼は激しい疲労を感じながら坂を帰るのにあえいだ。午前の日光のなかで静かに影を畳んでいた公孫樹は、一日が経たないうちにもう冴が枝を疎らにしていた。その落葉が陽を喪つた路の上を明るくしている。彼はそれらの落葉にほのかな愛着を覚えた。

堯は家の横の路まで帰つて来た。彼の家からはその勾配のついた路は崖上になっている。部屋から眺めているいつもの風景は、今彼の眼前で冴に吹き曝されていた。曇空には雲が暗澹と動いていた。そしてその下に堯は、まだ電燈も来ないある家の二階は、もう戸が鎖されてあるのを見た。戸の木肌はあらわに外面に向かつて曝されていた。——ある感動で堯はそこにゐんだ。傍らには彼の棲んでいる部屋がある。堯はそれをこれまでついで眺めたことのない新しい感情で眺めはじめた。

電燈も来ないのに早や戸じまりをした一軒の家の二階——戸のあらわな木肌は、不意に堯の心を寄辺のない旅情で染めた。

——食うものも持たない。どこに泊まるあてもない。そして日は暮れかかっているが、

この他国の町は早や自分を拒んでいる。――

それが現実であるかのような暗愁が彼の心を翳<sup>かげ</sup>つていった。またそんな記憶がかつての自分にあつたような、一種訝<sup>いぶ</sup>かしい甘美な気持が堯を切なくした。

何ゆえそんな空想が起こつて来るのか？ 何ゆえその空想がかくも自分を悲しませ、また、かくも親しく自分を呼ぶのか？ そんなことが堯には臙<sup>おぼろ</sup>げにわかるように思われた。

肉を炙<sup>あぶ</sup>る香ばしい匂いが夕凍<sup>ゆづ</sup>みの匂いに混じつて来た。一日の仕事を終えたらしい大工のような人が、息を吐く微かな音をさせながら、堯にすれちがつてすたすたと坂を登つて行つた。

「俺の部屋はあすこだ」

堯はそう思いながら自分の部屋に目を注いだ。薄暮に包まれているその姿は、今エーテルのように風景に拡がつてゆく虚無に対しては、何の力でもないように眺められた。

「俺が愛した部屋。俺がそこに棲<sup>す</sup>むのをよろこんだ部屋。あのなかには俺の一切の所持品が――ふとするとその日その日の生活の感情までが内蔵されているかもしれない。ここから声をかければ、その幽霊があ窓をあけて首を差し伸べそうな気さえする。がしかしそれも、脱ぎ棄てた宿屋の襦<sup>じゆ</sup>袍<sup>ぽう</sup>がいつしか自分自身の身体をそのなかに髣<sup>ほう</sup>髴<sup>ふつ</sup>させて来る作

用とわずかもちがったことはないではないか。あの無感覚な屋根瓦や窓硝子ガラスをこうしてじつと見ていると、俺はだんだん通行人のような心になって来る。あの無感覚な外圍は自殺しかけている人間をそのなかに蔵しているときもやはりあのとおりにちがいないのだ。――と言つて、自分は先刻の空想が俺を呼ぶのに従つてこのままここを歩み去ることもできない。

早く電燈でも来ればよい。あの窓の磨硝子すりガラスが黄色い灯を滲ませれば、与えられた生命に満足している人間を部屋のなかに、この通行人の心は想像するかもしれない。その幸福を信じる力が起こつて来るかもしれない」

路たすにゐる堯の耳に階下の柱時計の音がボンボン……と伝わつて来た。変なものを聞いた、と思ひながら彼の足はとぼとぼと坂を下つて行つた。

#### 四

街路樹から次には街路から、風が枯葉を掃つてしまつたあとは風の音も変わつていった。夜になると街のアスファルトは鉛筆で光らせたように凍いてはじめた。そんな夜を堯たかしは自分

の静かな町から銀座へ出かけて行った。そこでは華ばなしいクリスマスや歳末の売出しがはじまっていた。

友達か恋人か家族か、舗道の人はそのほとんどが連れを携えていた。連れのない人間の顔は友達に出会う当てを持っていた。そしてほんとうに連れがなくとも金と健康を持っている人に、この物欲の市場が悪い顔をするはずのものではないのであった。

「何をしに自分は銀座へ来るのだろう」

堯は舗道が早くも疲労ばかりしか与えなくなりはじめるとよくそう思った。堯はそんなときいつか電車のなかで見たある少女の顔を思い浮かべた。

その少女はつましい微笑を泛<sup>うか</sup>べて彼の座席の前で釣革に下がっていた。どてらのように身体に添っていない着物から「お姉さん」のような首が生えていた。その美しい顔はひと眼で彼女が何病だかを直感させた。陶器のように白い皮膚を翳<sup>かげ</sup>らせている多いうぶ毛。鼻孔のまわりの垢<sup>あか</sup>。

「彼女はきつと病床から脱け出して来たものに相違ない」

少女の面を絶えず漣<sup>さざなみ</sup>漪のように起こつては消える微笑を眺めながら堯はそう思った。彼女が鼻をかむようにして拭きとつているのは何か。灰を落としたストーヴのように、そ

んなとき彼女の顔には一時鮮かな血がのぼった。

自身の疲労とともにだんだんいじらしさを増していくその娘の像を抱きながら、銀座では堯は自分の痰を吐くのに困った。まるでものを言うたび口から蛙が跳び出すグリムお伽と噺ぎばなしの娘のように。

彼はそんなとき一人の男が痰を吐いたのを見たことがある。ふいに貧しい下駄が出て来てそれをすりつぶした。が、それは足が穿はいている下駄ではなかった。路傍に莫も薩ざを敷いてブリキの独こ樂まを売っている老人が、さすがに怒りを浮かべながら、その下駄を莫も薩ざの端のも一つの上へ重ねるところを彼は見たのである。

「見たか」そんな気持で堯は行き過ぎる人びとを振り返った。が、誰もそれを見た人はなさそうだった。老人の坐っているところは、それが往來の目に入るにはあまりに近すぎた。それだけでなくも老人の売っているブリキの独こ樂まはもう田舎の駄菓子屋でも陳腐ちんぷなものにちがいがなかった。堯たかしは一度もその玩具が売れたのを見たことがなかった。

「何をしに自分は来たのだ」

彼はそれが自分自身への口実の、珈琲コーヒーや牛酪バターやパンや筆を買ったあとで、ときには憤怒のようなものを感じながら高価な仏蘭西香料を買ったりするのだった。またときには露



店が店を畳む時刻まで街角のレストランに腰をかけていた。ストーヴに暖められ、ピアノトリオに浮き立って、グラスが鳴り、流<sup>ながしめ</sup>眇<sup>め</sup>が光り、笑顔が湧き立っているレストランの天井には、物憂い冬の蠅<sup>はえ</sup>が幾匹も舞っていた。所在なくそんなものまで見ているのだった。「何をしに自分は来たのだ」

街へ出ると吹き通る空つ風がもう人足を疎<sup>まば</sup>らにしていた。宵のうち人びとが掴<sup>つか</sup>まされたビラの類が不思議に街の一と所に吹き溜められていたり、吐いた痰<sup>たん</sup>がすぐに凍り、落ちた下駄の金具にまぎれてしまったりする夜更けを、彼は結局は家へ帰らねばならないのだった。

「何をしに自分は来たのだ」

それは彼のなかに残っている古い生活の感興にすぎなかった。やがて自分は来なくなるだろう。堯<sup>たかし</sup>は重い疲労とともにそれを感じた。

彼が部屋で感覚する夜は、昨夜も一昨夜もおそらくは明晩もない、病院の廊下のように長く続いた夜だった。そこでは古い生活は死のような空気のなかで停止していた。思想は書棚を埋める壁土にしか過ぎなかった。壁にかかった星座早見表は午前三時が十月二十何日に目盛をあわせたまま埃<sup>ほこり</sup>をかぶっていた。夜更けて彼が便所へ通うと、小窓の外の屋根

瓦には月光のような霜が置いている。それを見るときにだけ彼の心はほーつと明るむのだ  
った。

固い寢床はそれを離れると午後にはじまる一日が待っていた。傾いた冬の日が窓のそとのまのあたりを幻燈のように写し出している、その毎日であった。そしてその不思議な日射しはだんだんすべてのものが仮象にしか過ぎないということや、仮象であるゆえ精神的な美しさに染められているのだということ露骨にして来るのだった。枇杷びわが花をつけ、遠くの日溜りからは橙だいだいの実が目を射った。そして初冬の時雨しぐれはもう霰あられとなつて軒をはしつた。

霰はあとからあとへ黒い屋根瓦を打つてはころころ転がった。トタン屋根を撲うつ音。やつでの葉を弾く音。枯草に消える音。やがてサアというそれが世間に降っている音がきこえ出す。と、白い冬の面紗ヴェールを破つて近くの邸からは鶴の啼き声が起こった。堯の心もそんなときにはなにか新鮮な喜びが感じられるのだった。彼は窓際に倚よつて風狂というものが存在した古い時代のことを思った。しかしそれを自分の身に当て嵌はめることは堯にはできなかつた。

## 五

いつの隙にか冬至が過ぎた。そんなある日堯は長らく寄りつかかなかつた、以前住んでいた町の質店へ行った。金が来たので冬の外套がいたうを出しに出掛けたのだつた。が、行つてみるとそれはすでに流れたあとだつた。

「××どんあれはいつ頃だつたけ」

「へー」

しばらく見ない間にすっかり大人びた小店員が帳簿を繰った。

堯はその口上が割合すらすら出て来る番頭の顔が変に見え出した。ある瞬間には彼が非常な言い憎さを押し隠して言っているように見え、ある瞬間にはいかにも平気に言っているように見えた。彼は人の表情を読むのにこれほど戸惑ったことはないと思つた。いつもは好意のある世間話をしてくれる番頭だつた。

堯は番頭の言葉によつて幾度も彼が質店から郵便を受けていたのをはじめて現実に思い出した。硫酸に侵されているような気持の底で、そんなことをこの番頭に聞かしたらとうような苦笑も感じながら、彼もやはり番頭のような無関心を顔に装って一通りそれと一

緒に処分されたものを聞くと、彼はその店を出た。

一匹の痩せ衰えた犬が、霜解けの路ばたで醜い腰付を慄ふるわせながら、糞をしようとしていた。堯たかしはなにか露悪的な気持ちにじりじり迫られるのを感じながら、嫌悪に堪えたその犬の身体つきを終わるまで見ていた。長い帰りの電車のなかでも、彼はしじゅう崩壊に屈しようとする自分を堪えていた。そして電車を降りてみると、家を出るとき持つて出たはずの洋傘こうもりは——彼は持つていなかった。

あてもなく電車を追おうとする眼を彼は反射的にそらせた。重い疲労を引き摺ずりながら、夕方の道を帰って来た。その日町へ出るとき赤いものを吐いた、それが路ばたの槿むくげの根方にまだひつかかっていた。堯には微かすかな身慄ふるいが感じられた。——吐いたときには悪いことをしたとしか思わなかったその赤い色に。——

夕方の発熱時が来ていた。冷たい汗が気味悪く腋の下を伝った。彼は袴はかまも脱はがぬ外出姿のまま凝ぎようぜん然ぜんと部屋に坐まっていた。

突然あいきちに首のような悲しみが彼に触れた。次から次へ愛するものを失っていった母の、ときどきするとぼけたような表情を思い浮かべると、彼は静かに泣きはじめた。

夕餉ゆうけをしたために階下へ下りる頃は、彼の心はもはや冷静に帰っていた。そこへ友達の

折田というのが訪ねて来た。食欲はなかった。彼はすぐ二階へあがった。

折田は壁にかかっていた、星座表を下ろして来てしきりに目盛を動かしていた。

「よう」

折田はそれには答えず、

「どうだ。雄大じゃあないか」

それから顔をあげようとしなかった。堯たかしはふと息を嚙かんだ。彼にはそれがいかに壮大な眺めであるかが信じられた。

「休暇になったから郷里へ帰ろうと思つてやつて来た」

「もう休暇かね。俺はこんどは帰らないよ」

「どうして」

「帰りたくない」

「うちからは」

「うちへは帰らないと手紙出した」

「旅行でもするのか」

「いや、そうじゃない」

折田はぎろと堯の目を見返したまま、もうその先を訊かなかつた。が、友達の噂学校の話、久潤の話は次第に出て来た。

「この頃学校じゃあ講堂の焼跡を毀してゐるんだ。それがね、労働者が鶴嘴を持って焼跡の煉瓦壁へ登つて……」

その現に自分の乗っている煉瓦壁へ鶴嘴を揮っている労働者の姿を、折田は身振りをまぜて描き出した。

「あと一と衝きというところまでは、その上にいて鶴嘴をあてている。それから安全なところへ移つて一つぐわんとやるんだ。すると大きい奴がどどんと落ちて来る」

「ふーん。なかなかおもしろい」

「おもしろいよ。それで大変な人気だ」

堯らは話をしていくくらでも茶を飲んだ。が、へいぜい自分の使っている茶碗でしきりに茶を飲む折田を見ると、そのたび彼は心が話からされる。その拘泥がだんだん重く堯にのしかかつて来た。

「君は肺病の茶碗を使うのが平気なのかい。咳をするたびにバイキンはたくさん飛んでいるし。——平気なんだつたら衛生の觀念が乏しいんだし、友達甲斐にこらえているんだつ

たら子供みたいな感傷主義に過ぎないと思うな——僕はそう思う」

言ってしまったって堯は、なぜこんないやなことを言ったのかと思った。折田は目を一度ぎろとさせたまま黙っていた。

「しばらく誰も来なかったかい」

「しばらく誰も来なかった」

「来ないとひがむかい」

こんどは堯が黙った。が、そんな言葉で話し合うのが堯にはなぜか快かった。

「ひがみはしない。しかし俺もこの頃は考え方が少しちがって来た」

「そうか」

堯はその日の出来事を折田に話した。  
たかし

「俺はそんなときどうしても冷静になれない。冷静というものは無感動じゃなくて、俺にとっては感動だ。苦痛だ。しかし俺の生きる道は、その冷静で自分の肉体や自分の生活が滅びてゆくのを見ていることだ」

「……………」

「自分の生活が壊れてしまえばほんとうの冷静は来ると思う。水底の岩に落ちつく木の葉

かな。……」

「丈草しょうそうだね。……そうか、しばらく来なかったな」

「そんなこと。……しかしこんな考えは孤独にするな」

「俺は君がそのうちに転地でもするような気になるといいと思うな。正月には帰れと言つて来ても帰らないつもりか」

「帰らないつもりだ」

珍しく風のない静かな晩だった。そんな夜は火事もなかった。二人が話をしていると、戸外にはときどき小さい呼子のような声のものが鳴いた。

十一時になって折田は帰って行った。帰るきわに彼は紙入のなかから乗車割引券を二枚、「学校へとりにゆくのも面倒だろうから」と言つて堯に渡した。

## 六

母から手紙が来た。

——おまえにはなにか変わったことがあるにちがいない。それで正月上京なさる津枝さ



んにおまえを見舞っていただくことにした。そのつもりでないさい。

帰らないと言うから春着を送りました。今年は胴着を作って入れておいたが、胴着は着物と襦袢じゆばんの間に着るものです。じかに着てはいけません。――

津枝というのは母の先生の子息で今は大学を出て医者をしていた。が、かつて堯たかしにはその人に兄のような思慕を持っていた時代があった。

堯は近くへ散歩に出ると、近頃はことに母の幻覚に出会った。母だ！　と思つてそれが見も知らぬ人の顔であるとき、彼はよく変なことを思った。――すーっと変わったようだった。また母がもう彼の部屋へ来て坐りこんでいる姿が目にはらつき、家へ引き返したりした。が、来たのは手紙だった。そして来るべき人は津枝だった。堯の幻覚はやんだ。

街を歩くと堯は自分が敏感な水準器になつてしまったのを感じた。彼はだんだん呼吸が切迫して来る自分に気がつく。そして振り返つて見るとその道は彼が知らなかったほどの傾斜をしているのだつた。彼は立ち停まると激しく肩で息をした。ある切ない塊が胸を下つてゆくまでには、必ずどうすればいいのかわからない息苦しさを一度経なければならなかった。それが鎮まると堯はまた歩き出した。

何が彼を駆るのか。それは遠い地平へ落ちて行く太陽の姿だった。

彼の一日は低地を距<sup>へだ</sup>てた灰色の洋風の木造家屋に、どの日もどの日も消えてゆく冬の日  
に、もう堪えきることができなくなつた。窓の外の風景が次第に蒼ざめた空氣のなかへ没  
してゆくとき、それがすでにただの日蔭ではなく、夜と名付けられた日蔭だという自覚に、  
彼の心は不思議ないらだちを覚えて来るのだった。

「あああ大きな落日が見たい」

彼は家を出て遠い展望のきく場所を捜した。歳暮の町には餅搗<sup>もちつ</sup>きの音が起こっていた。  
花屋の前には梅と福寿草をあしらつた植木鉢が並んでいた。そんな風俗画は、町がどこを  
どう帰つていいかわからなくなりはじめるとつれて、だんだん美しくなつた。自分のまだ  
一度も踏まなかつた路——そこでは米を磨<sup>と</sup>いでいる女も喧嘩<sup>けんか</sup>をしている子供も彼を立ち停  
まらせた。が、見晴らしはどこへ行つても、大きな屋根の影絵があり、夕焼空に澄<sup>こずえ</sup>んだ梢  
があつた。そのたび、遠い地平へ落ちてゆく太陽の隠された姿が切ない彼の心に写つた。  
日の光に満ちた空氣は地上をわずかも距<sup>へだた</sup>つていながつた。彼の満たされない願望は、と  
きに高い屋根の上へのぼり、空へ手を伸ばしている男を想像した。男の指の先はその空氣  
に触れている。——また彼は水素を充<sup>みた</sup>した石鹼玉が、蒼ざめた人と街とを昇天させながら、  
その空氣のなかへパツと七彩に浮かび上がる瞬間を想像した。

青く澄み透った空では浮雲が次から次へ美しく燃えていった。みたされぬ堯たかしの心おきの燠おきにも、やがてその火は燃えうつつた。

「こんなに美しいときが、なぜこんなに短いのだろう」

彼はそんなときほどはかない気のするときはなかつた。燃えた雲はまたつぎつぎに死灰になりはじめた。彼の足はもう進まなかつた。

「あの空をみた涵みしてゆく影は地球のどの辺の影になるかしら。あすこの雲へゆかないかぎり今日ももう日は見られない」

にわかもたに重い疲れが彼に凭もたりかかる。知らない町の知らない町角で、堯たかしの心おきはもう再び明るくはならなかつた。



# 青空文庫情報

底本：「檸檬・ある心の風景 他二十編」旺文社文庫、旺文社

1972（昭和47）年12月10日初版発行

1974（昭和49）年第4刷発行

初出：「青空」青空社

1927（昭和2）年2月号、4月号

※編集部による傍注は省略しました。

※見出しの字下げが統一されていないのは、底本通りです。

入力：j.ujiyama

校正：野口英司

1998年10月17日公開

2016年7月5日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（<http://www.aozora.gr.jp/>）で作られ

ました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

# 冬の日

梶井基次郎

2020年 7月17日 初版

## 奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail [info@aozora.gr.jp](mailto:info@aozora.gr.jp)

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>  
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。  
<http://tokimi.sylphid.jp/>